【文献解題】

マリー＝ルイーゼ・ロート著　ローベルト・ムシル　倫理学と美学（その一）

Marie-Louise Roth : Robert Musil Ethik und Ästhetik, Paul List Verlag, 1972

（13×21cm版、本文三二四頁、注一七二頁、関係書誌四六頁、付録二三頁）

本岡五男

著者はザールラント大学近代ドイツ文学の員外教授。ローベルト・ムシル研究所長、ローベルト・ムシル国際協会（Internationale Robert-Musil-Gesellschaft）の会長。『作品に現われたムシル像』（Robert Musil im Spiegel seines Werkes）、『ローベルト・ムシル　演劇―批評と理論』（Robert Musil Theater-Kritisches und Theoretisches）などの著書の他に、諸雑誌に多数の論文がある。

本文は、序論（Einleitung）、第Ⅰ部　倫理的基本姿勢（Die ethische Grundhaltung）、第Ⅱ部　芸術観（Kunstbetrachtung）、第Ⅲ部　文学ジャンルの理論（Die Theorie der Dichtungsgattungen）、第Ⅳ部　絵画（Malerei）、結び（Ausklang）からなる。注のあとに八〇三点の関係書誌（ビブリオグラフィ）と、執筆年代不明のため全集に収録されることのない論説一〇篇が付録としてそえてある。関係書誌は年代順に並べてあって、ムシルの精神形成や思考過程が辿れるようにしてあり、また、付録の未公刊資料は本文中の部分的引用を補なうものである。

本書では論文やエッセーや書評や日記や手紙などが作品解釈の手掛りとして、あるいはその論拠として援用されるのではなく、それ自体の検討によってムシル像を浮び上らせようとする。特にエッセーは、ムシルの場合、作品と同等と見なされ、省察に重きが置かれるとエッセーになり、形成に重きが置かれると作品になるとする。そのために丹念な、網羅的とも言える資料の検討が行なわれる。いわばムシルの精神的な家財の一切がとり上げられ、それらがどこから来たか、どういうものなのか、どこに配置されているのか、他所の家財と比べてどうであるかが、精力的に調べ上げられるのである。夥しい引用があるのはそのためであって、著者はムシルの遺した資料だけではなく、書評の対象の原典に目を通し、日記に記されている書名によってその書物を読み、更に、ムシルが直接ふれなかった数多くの哲学者や科学者の思想をふまえて論述を進めて行く。

序論を要約するとすれば、エッセー群の概観と、「考える詩人」としてのムシル像の紹介と言えるであろう。ムシルは保守的な雑誌にも進歩的、革命的な雑誌にも執筆し、その取り扱った分野は文学のほかに、芸術論、心理学、社会学、教育学、国民経済に及び、自然科学や工学にまで拡がる。比較的短い書評や劇評はウィーン、ベルリン、プラークの新聞に掲載されたものである。これらは理論体系を持たず、その時その時のムシルの思考内容を示すのであるが、それにも拘らずそれらには、緊張(Spannung)、動揺(Bewegung)、合一(Vereinigung)なる型がムシルの根本理念として一貫している。

二〇世紀の生体解剖家野郎(Monsieur le vivisecteur)と自称するムシルは、現状を観察し、分析し、真の現実を求める。真の現実は ratioid と nicht-ratioid(心理学者 Hans Driesch の用語「類精神」(psychoid)に倣ったムシルの造語。「類理」、「非類理」とでも訳すべきか)が相互に影響し合っている「他の存在」(das Anderssein)にあるとする。著者はムシル文学の中核はこの「他の存在」への憧れで

ある、と把える。ムシルにとって文学の創造原理は「形成さるべきものとしての生」（das Leben als etwas zu Gestaltendes）である。そして、ムシルのエッセーは、規格化した現実の進化、変容への強い要請と、固定化した機械的な秩序のカテゴリーから脱け出そうとする意志から生れたもので、「まだ存在しないが存在可能な現実と生き方の発見」への「活気ある思考実験」である。ムシルは人間を「中間的なもの」（ein Zwischen）、「境目にあるもの」（eine Grenze）、「過渡的なもの」（ein Übergang）と見、あるべきもの、なるべきものによってはじめて「統一体」（Einheit）になると考える。これは変容可能性の認識であり、倫理的革新をめざす思考の源である。しかし、ムシルは単なる空想や哲学的思弁に陥って自らを失うことはない。「省察は内的な倫理的態度、ならびに詩人の時代との対決から生れた」ものであり、「彼の文学的エッセーは時評と同じく、人生と社会に対する人間の《他の》態度に方向を与える」ものである。ムシルは「統一体」を求めて内心の問いに答えて行く。ムシルを「考える詩人」と著者が呼ぶ所以である。

それでは、何故に、また、どのように「他の存在」を志向するに至ったか。この問題の扱われるのが第Ⅰ部の倫理的基本姿勢である。

二〇世紀初頭における因果律の行き詰まりと、精神の世界やその価値の再発見、懐疑を通じての新しい可能性の予感によって、機械的な思考を認識の極致として自然現象を合理化し、偶然や恣意を排除する因果律や数量的な法則に疑いの目が向けられ、ダイナミックな力、バイタリズム、偶然、例外、一回限りのものに注目される。ムシルは時代のこういった精神的変動を背景にして、科学的、合理的、論理的な面と、非論理的、感情的な面とが相倚って現実の全体をなすとするのである。工学士ムシルは、可能なものの極限に迫る自然科学の根本方針を肯定することにより、可能性感覚を思考するに至る。合理的な現実の中に織り込まれている非合理的な現実の体

験、偶然的なものや理解できないものに支配されているという体験は『生徒テルレスの惑い』(Die Verwirrungen des Zöglings Törleß) に示されている所であるが、非法則的な必然性と存在の不可測性が、魂の発展の無限の可能性が、科学的に体系づけられるものに対置される。ムシルは科学の新しい認識、即ち、大数の法則、偶然や確率の理論を倫理にあてはめる。ムシルの日記の中に、確率論に関して二〇名を越える物理学者や哲学者の名前の記載を見出した著者は、これらの人の書物がムシルのエッセーの養分になっていることを指摘し、アインシュタインの相対性理論もムシルに影響したであろうとし、『テルレス』や『トンカ』(Tonka) にその養分が詩的に表現されていることを示す。道徳世界もまた変容し得るのであり、極限状態においては人間は内的動機に左右される。ムシルは、生に本来備わっている合法則性、宇宙的な秩序から生じる決定を、「動機づけ」(Motivation) と呼ぶ。ムシルにとって、非合理的なものは現実の一部である。詩人としてのムシルは、合理的な現実と非合理的な現実の合一をめざす。『テルレス』の結末においては、悟性と感情は対立するものとしてではなく、つながりあるものとして描かれる。

著者は各分野での精神的時代相を示し、それとムシルとの関係を追って行く。

生物学において変革が起り、生気説 (Vitalismus) が機械論 (Mechanismus) にとって代わる。有機体はもはや機械的な因果関係の観点においてではなく、目的論、エンテレヒーの観点において理解されるようになる。ムシルはこの動向にそって『生気説による生物学の哲学』(Philosophie der vitalistischen Biologie) なる論文を発表するが、これが形態心理学に向かう契機となる。

心理学においても二〇世紀初頭において、ヴントの統覚心理学が心理現象の機械的な解釈にとって代わり、A. Vierkandt は、科学的な心理学の因果律的方法を精神科学的方法によって補なう必要を説く。学生時代に科学的

心理学を意識的に学んでいたムシルは数多くの心理学書にあたってその研究を深めて行ったが、芸術活動に関しては形態心理学に負う所が大きい。メロディは音の集まりから成っているが、各音の表現可能性からは説明できない全体ができあがる。ゲシュタルトは部分の総和以上のものである。ムシルは『実証主義小教本』(Kleines Lehrbuch des Positivismus) において、ゲシュタルト理論を芸術作品に転用する。美的統一体をなすのは、部分的な諸要素集積の法則ではなくゲシュタルトの法則である。ムシルは芸術と科学は相補なわねばならないと考えるのである。E.R. Jaensch の本質直観 (Eidetik) の指摘、Lévy-Bruhl の、直観像においては抽象的な思考よりも生きた思考が先立つとするテーゼが、「他の状態」の関係でムシルの関心を呼ぶ。「他の状態」に現われるような、世界に対する異常な態度を科学的に解明しようとして、ムシルは直観と呼ばれているものの研究に向かう。心理病理学、犯罪心理学、群衆心理学、精神医学、社会学がその対象になる。

一般化、体系化を断念して動機づけられた存在を把握しようとする時代精神にそって、ムシルは、リルケと同じように、事物の外的形態、事物の本質と存在を経て、合理的なものと非合理的なものが止揚される新しい空間、第三の次元を見出そうとするのである。

ムシルの日記に現われる書評、抜き書き、及び書名は枚挙するに遑がない。それらは殆んどあらゆる分野に亘り、文法、文章論、魔術、ヘブライの神秘説、政治理念、国家論、人種問題、ナチズムはもとよりプロシャ議会の議事録、スポーツ記事にまで及ぶ。ムシルは個人的に、文学的に、科学的に関心のある材料を、四〇年に亘り不断に蒐集して来たと言える。かく見てくると、ムシルは百科全書家であったように見える。だが著者は、ムシルのオリジナリティは詩人たる点にある、と言う。詩人の鋭敏な感覚、偏見のない柔軟な精神は、時代の精神的変革を背景にして、地震計のように時代の多種多様な

変化を把え、合理的に得られた認識、知識、思索の記録を、非合理的なもの、名状しがたいもの、不可量的なものの形成、照明に役立たせたのである。

生体解剖者の分析は鋭い批判、時にはイロニーにもなるが、その底にはユートピヤ的思考がある。ムシルにとって、特権的な真理も、批判の余地のない評価も存在しない。がしかし、その批判は、変化と発展のために事柄に疑いの目を向ける倫理的欲求から生れたものである。ムシルの見解は、多種多様な考え方、イデオロギーの戦い、救済、ジュンテーゼ、調和、全体性への希求などの入り混った混沌状態はそれらを糺す悟性、精神的規準の欠除によるとし、「ヨーロッパ精神の今日の状態は崩壊ではなく、未完成な過渡期、爛熟ではなく未熟である」とする。シュペングラーのように、西欧は没落するとは考えない。時代には内容が欠除しているのではなく、機能が欠けているだけだとする。生体解剖者は「そのままにしておい」(das Gewährlassen)たり、「だらだらとしきたりを守り続け」(das Fortwursteln)たりすることができず、「惰性的思考」(Denkgewohnheit)を脱して「時代に合った生活形態」を求める。しかし、完全に産業化した構造の中では、精神と倫理のみを以ってしては人類は救えない。可能なのは部分的解決のみである。生体解剖者は、「空想的社会改良論者」(Utopist)として平均的人間のための存在ではなく、千里眼として、覚醒者として生の周辺に立つ者である。この点に、ムシルが結局は未解決感や挫折感を抱くに至るいわれがある。

ムシルは、「人生の論理的無秩序」と偶然の経験から、「固定した評価の解消」と目に見えぬ固定した制約からの脱出の必要を感じる。ムシルにとって、人生は一回限りのものであり、偶然に支配されている孤立した事象である。しかし、混沌とした偶然的なでき事の中に秩序づける法則がある。それは統計学的法則である。著者は、ムシルの「帰納論理」は Richard von Mises の確率論と量子力学の影響による、と言う。一回性は、『トンカ』

の中の、夏のさ中に雪の舞い落ちる情景に描かれているが、それは科学的には説明のできない「非法則的必然性」(eine ungesetzliche Notwendigkeit) とも言うべきものである。思考はムシルにとって抽象的な機能ではなく、人間に内在する生命力、奔放な創造力であって、精神の冒険としての思考は、自主性、一回性、個性を本質とする。思考とは、すでに考えられた思想をなぞることではなく、個人的に吟味し、決定することを意味する。思想体系は、個人の体験、感情、記憶から生じ、それらの中で新しい思考可能性が成熟するのである。また、思考とは、確実な判断ができるよう、自分自身との対話において自己発展することであり、自分自身に決着をつけ、評価へ自己決定することである。この意味で思考は同時に生活経験である。

現実が疑問視された今、新しい経験的基盤が必要となる。ここで数学が新しい思考態度、冒険性と変化する可能性の例とされる。冷静にして厳密な「エンジニヤ精神」を持ち、並はずれて柔軟な、大胆な思考をする「数学的人間」(der mathematische Mensch) が、科学時代の新しい方向の体現者である。数学は論理的な思考構造であって、事実や観察から出発するが、「別なあり方も可能」(Noch-anders-sein-können) という精神的可能性の経験に基づく帰納的な方法である。数学において、経験を新しい別な面から見る可能性が生じる。数学は仮定によって現実的な結果を得る。著者は、Vaihinger の、思考は仮定という術策を用いて目的を達しようとする人生克服の一手段であり、数学の作り出すものはたとえば分数、無理数、虚数のごとき全く架空の観念の産物であると言う考え方とムシルの考え方の相似を指摘する。「時代の病弊」(Zeitkrankheit) に対して提示するムシルの解毒剤は、現実から発して、真理を、事物においてのみならず、それを越えて、あるべきもの、可能なもの、理性と感情が結びついた精神の領域においても求める思考である。テルレスにとって真理なる言葉は固定し得ないものであった。

仮定、幻想、「非現実との比較」(das Als ob)、視点の移動、「蓋然性」が、真理にとって代わる。仮定の必然性、思考における非合理の発見に若いテルレスはと惑ったのだったが、それをむしろ積極的に認め、視点を変えることにより解決を見出そうとする。この考え方は『特性のない男』(Der Mann ohne Eigenschaften)に継承され、「ユートピヤ主義」(Utopismus)あるいは「可能性感覚」(Möglichkeitssinn)と呼ばれることになる。「仮説的に生きる」(hypotetisch leben)、「厳密性のユートピヤ」(Utopie der Exaktheit)、「エッセー主義のユートピヤ」(Utopie des Essayismus)なる言葉は、「現実をおそれず、現実を課題、虚構として見る」思考方向を示す術語である。現実を直視し、勇気を以って判断し、見せかけにのらず、真実を想起し、なおも可能な現実の発見に手をかすのが、思想家としての詩人の使命である。数学に似た「人生法典」(Lebenskodex)、精神的な方法論を見つけるのが、ムシルの関心事であり、使命である。

初期のエッセーにおいて予感、直観として現われたものが、後の、特に一九三〇年以後のエッセーでは意識的な関与となる。個人としての責任感がますます強くなり、世界を新しく構成する場合の精神的なものの意義が示される。文学の最終的な役割を、ムシルは、理論から実際へ、精神から政治へ、思考から行為への移行にあるとする。なるほど、政治と文学の機能は、人生と人生についての考察と同じく、異なるものではあるが、両者は個人と社会をより高い段階へ至らしめるために相補ないあい、ひとつになり得るものである、と考える。人間のタイプの間、道徳的人格の内部にはさまざまな移行段階があり、人間は「過程」(Proze3)である。人間は状況に応じて反応し、生存条件の変化とともに変化する。人間は内的決定と外的条件の結果である。生存条件とそれについての見解が変われば、人間の本質、状況、「意見」(Äußerung)、思考態度、倫理的態度は変わる。ムシルにとって重要なのは、社会条件の修正、形成可能性(Bil-

dungsmöglichkeit）の拡大、関連構造の強調による精神的存在の強化である。人生の意義、状況や存在の意味を尋ね、実在（Existenz）に秩序をもたらす責任を意識した思想家のムシルは、人生に対する「他の態度」（das andere Verhalten）においてその解決を求める。そして、詩人としてのムシルは、精神的な対決や体験を「例示による人生哲学」（eine Lebenslehre in Beispielen）に変えようとする。

モラルの一般的変革の本質は、「同様に存在するであろうすべてを考え、存在するものを存在しないもの以上に重視しない」能力を作ることにある。それ故に、モラルの変革は次の一歩に、変化に期待される。たとえば「旅」は変化を用意する象徴である。ムシルの作品の主人公はすべて旅に出、旅において自己に戻り、他の状態に移され、「回心」（Umkehr）に至るのである。ムシルは、ラヴォアジィエの質量不変の定律に対立して、物質の変容は内在する力にある、各元素は新しい可能性への能力を秘めているとしたが、この考え方が倫理的な「他の」態度を求める端緒であった。決定力を持っているのは意志だけではなく、心理的、倫理的な秩序の原理に基づいた、行為を必然的に導く本能的な反応である。この際、本能と理性の間のジレンマが問題となるが、ムシルは、理性の一方的な過大評価を拒み、本能に対する信頼の欠除を非難する。

いかにして魂を発展させることができるか、いかにして生を高めることができるか、が若い頃のムシルの主要問題であった。倫理というのは、人間の本性をより高い段階へ変革することを意味する。生の向上と統一体への希求は、リカルダ・フーホの『ロマンティクの全盛時代』（Blütezeit der Romantik）においてムシルの見出したものであるが、しかし、それは内的な美、深遠な生の意味で把えられたのではなく「他の現実」（die andere Wirklichkeit）の意味においてであった。より密度の高い、より意味ある生へのあこがれ、意味のないものから意味ある

ものへの移行の、あの言葉のない瞬間へのあこがれ、人間が自らに近ずくことによって自分自身を見出す瞬間へのあこがれ。目には見えないが存在する意識内容を厳密に証明し、内容と併存しつつ独立して存在する機能を示そうとした二〇世紀初頭の心理学の革命は、このあこがれと同じ認識にもとずく。ムシルは、ヴントや Karl Girgensohn に従って感情の分析から発して、「他の状態」においてリアリティを見出す「人間の抑圧されたこの半面」(diese unterdrückte Hälfte des Menschen) を、自然科学的な精密さで明確にしようとする。宗教心理学者 Girgensohn は、自我 (das Ich) は「観念の束」(Bündel von Vorstellungen) に他ならないことを示し、感情を自我機能 (Ichfunktion) と説明する。そして、宗教体験においては、自由な意志決定は多かれ少なかれ無意識の前提からなされる、意志機能は内的変化が完成された徴候であり、新らしい生の表現形式であり、活動形式であり、宗教的基盤から否応なく生じてくる結果である、しかし、宗教の根元的な秘密は、他のもの、つまり、自由であることを意識せずに生じる自我の新らしい態度の中にある、と言う。Girgensohn が強調する、法悦状態の神秘的体験の特徴は、ムシルが「他の状態」の体験に適用する判断基準に相応する。「他の状態」は、体験された、他の、人間的な感情素質 (Gefühlsdisposition) であり、人間に内在する、世界に対する態度の、他の可能性である。感情そのものの永続性、同一性は否認される。そして、この可変の感情に、法悦としての、普通の意識経過の変容としての「愛」が対応する。神秘的な法悦は、すぐれた個人の特権なのではなく、現実に、日常的に、すべての人の経験する所であり、側流 (Nebenströmung) として、周辺意識 (Randbewußtsein) として、高次の心理生活に付随しているものである。

なお、著者はここで、ムシルの「他の状態」の構想に影響を与えたものとして、Konstantin Oesterreich の感情心理学を挙げている。自我は活動的な心身の状態で

あると同時に、静かにして深い感情の観想（**Gefühlskontemplation**）でもあるという感情の二重構造は、人格意識の変化の可能性を含んでいるわけである。

神の内在的体験、あるいは「神との意識的なふれあい」は、「他の状態の体験」に相応する。ムシルは、宗教的経験を、自我と宇宙全体との合一の体験に転用する。ムシルの言う「他の状態」は、神との精神的結婚という神秘的体験の世俗的状態である。神秘主義者が神と呼ぶ時、ムシルは「他の状態」と呼ぶ。「他の状態」とは、現実が突如として内面に移された、「自己の本質の奥深くに沈められた体験」である。このように視点を変えることにより、事物は、自然に、直接的に人間と関わりを持つようになり、客観と主観がひとつになる。ムシルが、「合一」（**Vereinigung**）とか、「揺れる均衡」（**schwebendes Gleichgewicht**）とか言う時、それは「他の状態」、回心の状態を意味する。この状態の特色である内面への沈潜は、宗教生活や愛に特有の状態である。ムシルが愛の状態と呼ぶこの根元的体験の本質は、自我を引き裂いて最高の存在価値へ、魂と自己自身との合一へ、ひいては世界との合一へ集中（**Intensivierung**）し向上（**Steigerung**）させることである。ここに、世界と人間、感情と事物の相互作用が起こる。詩人はこの言葉のない体験を、言葉によってしっかり引き留めておこうとする。この言葉のない体験を解明し、心理学的、神秘主義的、宗教的に基礎づけようとする。別な考え方、別なあり方、別な感じ方は変容可能性を意味し、凝固するのではなく、より豊かに、より意味があるように生きることを意味する。ここにおいて美学と倫理学が触れ合う。

「愛の状態」において事物は創造の状態に入る。事物は一回限りの、昇華された、絶対的な領域へと高められる。エロス的な、宗教的な、芸術的な、神秘的な体験に似たこの体験は、事物に関わり、理解し、自我によって世界を克服しようとはせずに自我の中へ世界を流入すること、事物の間の境界や分離を除去すること、普通の感

情を抹消して感情を濃密にし、拡張すること、別な考え方、世界に対する倫理的態度を以って事物を見ること、主観性をもっと重視すること、心的内容を拡大し、向上させ、現実を高め濃密化し、とるに足らぬことは拒絶すること、と要約することができる。即ち、大きな飛躍と自己投入、「創造的関与」(eine schöpferische Teilnahme)、共感である。法悦感、感情移入の可能性、向上への促しや、宇宙との一体感(kosmisches Einheitsgefühl)としての愛の把握は、ムシルの作品の数多くの愛の体験の場において指摘することができる。ムシルの場合、法悦における忘我の状態、無特性は、意識のない恍惚や神化を意味するのではなく、肉体、精神、心がひとつとなって全体的価値を形成することである。著者は、ムシルのこの態度はむしろギリシヤ古代の宗教観に近い、と言う。また、「動機づけ」や意味形成の理念は、ストア学派においてムシルが見出した所のものである。幸福は事物にではなく、事物に関する見解に依存する。絶対的な倫理的目標は、存在ひとつになること、すぐれた(vorzüglich)状態とそうでない状態を理知的に選択することである。この倫理的志向において重視されるのは、出来ごとの形ではなく、出来ごとに与えられる意味、価値である。問題は、何をするかにあるのではなく、いかにするかにある。ここに、「他の価値づけ」(ein anderes Werten)、世界に対する他の態度が生じる。感じ方の変化、他の志向は、感情的な態度と知的な態度がふれ合う、人間的可能性のより高い段階である。自己を克服しようとする同じ衝動が、芸術作品の中にも、道徳的態度の中にもある。かくて倫理と美学はひとつのものとなる。

倫理的美学的態度は、「遠近法的なずれ」(die perspektivische Verschiebung)や個人個人の立場に依存するものであるから、人間の能力や可能性を解明し、意識と、可能な人間的機能をめざめさせることが必要である。他方、芸術の使命は、新しい倫理の方向を示し、「真の生」(das wahre Leben)への刺戟たることである。この前提

からムシルは、現在に適合した精神教育の形を求め、教育の合理化、時代の肯定、誤った伝統的な考えの払拭、社会に対する新しい働きかけで以ってする価値の更新なるテーマを、「真の生」への希求と並べて打ち出す。著者は、ムシルは内面の国に通じているばかりではなく、社会科学的な思想家でもある、と言う。ムシルは特に評論（kritische Schrift）において、社会の教育者、改革者たるを示す。世界に影響を及ぼすと共に世界を受け入れ、それを内面化し、詩的に形成するのがムシルの根本姿勢であり、この両者の間をゆれ動く振子がムシルの創造の独創的な所である。

人間は形のととのわぬコロイド状のものであって、これに形を与えるべき避けがたい責任がある。ここに再組織の意図が生じる。組織、人間行動の規制、制度化（Institutionalisierung）のみが人間の塑像性に支柱と形を与える、とムシルは考える。精神の発展と形成、ならびに社会形体の組織が必要であり、「誤った教養」（Fehlbildung）に対し有効な教化手段がとられなければならない。劇場、読書、芸術、およびその作用を高める方法によって新しい内容を作り、社会生活に新しい秩序をもたらす必要がある。しかし、再組織への意志、社会変革への意志と言っても、ムシルの場合、それは政治的ではなく、倫理学者、芸術家としての意志である。Johannes Plengeの『革命家の革命』（Die Revolution der Revolutionäre）において政治的ベースでの再組織なる解決を知ったが、ムシルはそれを精神的、芸術的平面に移し、精神的な組織政策（Organisationspolitik）を実際的解決よりも優先させる。ムシルは、芸術家として、精神の政治化にはげしい拒絶反応を示し、アクティヴィズムを批判して、ヘロイズム、予言者的性格、権力主義的支配による理念の固定化などに対して不安を抱き、「二者択一的イデオロギー」（Entweder-Oder-Ideologie）、「文句つけイデオロギー」（Aberideologie）に対する嫌悪を表明する。ムシルは、解決を美学的問題として、「変容可能性」（Verän-

derungsmöglichkeit)として把える。芸術の形成者(Gestalter)は、その創造活動により外界を新たにし、より高次の生を示すことができる。ムシルは、精神に対する責任と精神的独立への希求から政治的プロテストより離れ、時代の精神的克服の方向をとる。彼のアクティヴィズムの本質は、今のこの現在を、倫理的、美学的領域にある「他の存在」への飛躍のための踏み台と見ることにある。

歴史の無意味さ、個人の無力を知って法則を見出そうとしたムシルは、確率論の研究を経て、社会、環境、制度が個人に決定的な影響を与えることを確認する。精神的な領域はもはや個人ひとりの課題ではなく、社会の課題でもある。ムシルは「教養」(Bildung)を分析して社会状態を批判的に観察し、教養の可能性を探り出す。しかし、彼の教養の理念は啓蒙的でもなく、古典的でもなく、また、集団に重きを置く社会倫理的教養でもない。ムシルは個人と社会の中間的立場をとる。

歴史を顧みる時、教養および教養への希求が危機的段階に達していたことが判る。心的崩壊現象は市民時代崩壊の傷痕である。ムシルは「教養を持った後での後悔」(Bildungskatzenjammer)、あるいは「型にはまった教養」(Schablone der Bildung)と言う。この危機の原因は、第一に、伝統に結びついた教養概念の凝固、硬化、第二に、政治的解放による教養の持つ社会的栄光の喪失、第三に、表面的で、深さと拡がりを持たぬ不均一な教養の分布、第四に、人口の急激な増加、第五に、教養手段、教育制度の無力、最後に、考えられたものと実現されたものとの間の断絶である。ぼろぼろに(abgebröckelt)老朽化した社会構造は、麻痺的、抑制的に作用する。ここにおいて、社会構造と他の生活要素を鋭く吟味し、人間としての価値に至る道として個々の人間の心を形成するのが、新しい方向を示すために打ち立てられるテーマとなる。

新しいものへ移行するためには、現実を批判的に止揚して美学的・倫理的に現実を新しくすることが必要であ

る。目標は教養の新しい組織化である。ムシルは生体解剖者であることを越えて、社会心理学的、教育学的な、新しい社会の組織者となる。

教養を媒介する教会や学校は、統一された世界観がないからもはや有効ではない。包括的な世界像がなくなった結果は、放縦と分立主義である。国民教育なる課題はまた、精神教育者としての詩人の課題となる。文学は、「学校知」(**Schulweisheit**)に対し、「人生知」(**Lebensweisheit**)である。遺稿の覚え書『学校問題について』(**Über das Schulproblem**)は、ムシルの教育に対す態度を示している。学校問題は人生問題と結びつけられる。学校は人生の準備たるべきである。肝心なのは、知識ではなく、知性の指導、鼓舞、人生に対処する方法である。更に、「精神作業」(**die geistige Arbeit**)は学校で終らず、「教養人の継続的授業」(**Fortbildungsunterricht auch des Gebildeten**)も必要である。ムシルは精神の発達と、精神の緊張力の維持を配慮する。ムシルは、教育の目的を、人間を「開くこと」(**Eröffnung**)、精神的なものの自然の発達を助けることにあるとする。「死んだ知識」(**das tote Wissen**)は人間を変えない。それ故に詩人は、作品によって、思考と精神への欲求を目ざめさせようと努める。シュペングラーの『西欧の没落』に対しては、精神的な緊張力と精密な思考があれば没落はくい止めることができるであろう、と批判する。どの時代にも積極的な萌芽がある。ムシルは、時代を新しい可能性創造のための跳躍台として肯定することに、救いの可能性を見る。条件が変われば この可能性は現実となるであろう。ムシルにおいては、精神と文化の作用の問題は、教養の問題と緊密に結びついている。

精神の問題は、精神の本質そのものにではなく、状況に対する精神の関係、課題、機能、作用において取り扱われる。ムシルは、精神と時代、精神と政治の関係を分析する。精神を政治に従属させるのは精神に悖るが、逆に、精神の発展は政治状況に左右される。政治的なもの

は精神を破壊もし、促進もするが、政治には精神的基盤がなければならない。それ故に、詩人は、社会秩序は精神によって決められたプログラムに従うべきであるとする。精神は常に新しい可能性をよび起こす創造的原理である。そして、政治は精神的なものを形成し、精神的価値を具体化し、実現する。この弁証法的関係をムシルは常に強調したが、政治的な力の堕落をなげき、ついには政治的なものを批判的に拒絶することになる。そして、精神はまっとうな世界を構成する窮極の原理を持っているか、という疑問は未解決のままとなる。

精神は形成するもの、感情と理念の綜合、内的統一体と見られ、精神の使命は、「知ること」(Wissen)や「認識すること」(Erkennen)ではなくて意味付与、価値づけであり、本能の「放埒さ」(Wildheit)とイデオロギーや無秩序な事実の混沌の中に秩序をもたらし、「生の解釈」(Lebensausdeutung)を引き受けることである。精神と文化に対する判断規準は、「動揺」(Bewegung)、「発展」(Entwicklnng)、「合一」(Vereinigung)である。つまり、精神と文化は同一のものである。ムシルの言う「文化」なる概念は、文化の凝固に対するプロテストである。文化をとり入れ、自分自身の中で変える創造的な人間にとって、文化は生き生きとした新らしい創造であるべきである。精神的な秩序と生きた価値がひとつになる所に、文化の栄える展望が開ける。そして、この判断規準によって、政治形態の文化的価値が評価されるのである。ニーチェにとって文化は専ら個人的なものであったが、ムシルにおいては、ニーチェを越えて、社会と結びついた概念になる。個人と全体の間の共力関係はムシルにとって本質的なものであって、ムシルは、全体の中に根をおろしているという感じを失なわない。文化の救済を、ムシルは、個人と社会構造の精神的な再組織から期待する。詩人は、精神の組織と形成という領域で、作品により社会に働きかけようとしたのである。しかし、詩人はその後社会秩序を変える望みを失ない、イロニーと批判

的態度により、また、芸術において現実を変え、美学に関わることにより打開策を見出そうとする。文学は「例示による人生哲学」である。ムシルは、美学的要素により人を震憾させ、あらゆる硬化した支配構造から「意味あるもの」(das Bedeutende) を目ざめさせることが可能であると、信じるようになる。人間を改造するために新しい美学を見出すことは、「他の人間を見出」そうという考え方に相応する。ムシルにおいては、美学と倫理は緊密に結びついている。

ムシルの芸術の目的は、混沌とした状況を克服するために解決の可能性を考え、「全体の秩序」(Ordnung des Ganzen) を得んと努力することである。文学批評は社会批評であり、美学上の問題提起は新らしい他の生への手がかりである。

ここにおいて、「倫理的基本姿勢」は第Ⅱ部の「芸術観」に通じることとなる。